

Title	移住と言語変容 : 福井県若狭地方出身者を例にして
Author(s)	濱田, 隆文
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 45 P.47-P.64
Issue Date	2011-12-26
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/25097
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

移住と言語変容

——福井県若狭地方出身者を例にして——

濱 田 隆 文

キーワード：移住，言語変容，関西，若狭

1. はじめに

近年の日本社会は、何らかの事情による人々の移住、特に個人での移住が多く見られる。地域社会から、高等教育を受けるために他地域に移住する、就職先を求めて移住する、就職後転勤などにより移住するなど、移住のきっかけは多い。新しい土地に移住するということは、その地域の方言と出会うことである。そうした場合、人々は自分が生まれ育った地域の方言と、移住先の方言との間で、どのような方言使用を行うのであろうか。

本稿は、福井県若狭地方出身者を対象に、移住を経験していないもの、移住し、現在他地域（若狭地方外、具体的には関西地方）に居住する者、他地域に居住後、再び若狭地方に戻った者について、その方言談話を収録し観察していく。

以下、本稿の構成について述べる。2節では、先行研究を確認する。3節で調査、及びインフォーマントについて概略を示したのち、4節で結果を示す。5節では、移住による言語変容について調査から明らかになったことをまとめ、そのような方言使用に至った背景について考察する。6節では全体のまとめ、および今後の課題について述べる。

2. 先行研究

真田編（2006：104）では、「方言と方言、あるいは方言と標準語が接触するときの社会的な状況」について、以下のような分類をおこなっている。

- (a) 当事者の日常生活空間からの移動を伴わない場合
 - (a-1) 隣接地域の人々と会話を通して方言接触を経験する場合
 - (a-2) マスメディアや書籍などを通して標準語との接触を経験する場合
- (b) 当事者の日常生活空間からの移動を伴う場合
 - (b-1) 旅行など一時的な移動によって方言接触を経験する場合
 - (b-2) 移住や転居など長期的な移動によって方言接触を経験する場合
 - (b-2-1) 単独での移動
 - (b-2-2) 集団での移動

本研究では、このうち (b-2-1) 「単独での移動」について考察する。以下、単独での移動による言語変容について、先行研究をみていく。

まず、アクセントの受容に関する研究からみる。杉藤（1981）は、大阪に在住する者のアクセントについて考察を行い、そこでは他地域からの移住者も対象にしている。その結果、10歳になった後で移住してきた者について、京阪式アクセントの受容率が低いことを明らかにし、アクセントの習得が9歳までになされている可能性を述べた。それを受け、余（2003）では、言語形成期を関東地方で過ごした後に大阪に移住した者を対象に、京阪アクセントの受容について考察を行っている。また、余（2006）では、勝山式アクセント、京阪式アクセント、東京式アクセントを使い分けるインフォーマントについて、その使い分けに至った過程について、大阪での

居住歴とメディアによるインプットに注目して考察を行っている。

荻野（1995）、不二門（1988）は、大阪出身者が東京に移住することによる言語変容について、特に言語使用意識に注目して行われた研究である。荻野（1995）は、インフォーマントに質問項目を多数用意し、「使う」、「大阪では使った」、「聞いたことはある」「聞いたこともない」などの使用意識をアンケート、面接調査によって確認し、その結果を総合して「方言使用点」という形で数値化している。不二門（1988）は、東京に住む関西出身者に対して、東京、大阪それぞれの方言のイメージや、場面による使い分けについてインフォーマントの使用意識を問うている。

ロング（1989、1990）は、全国から大阪や京都に移住した者について、方言の使用意識について調査を行っている。また、岸江・ロング（1992）は特に、沖縄から大阪への移住者に注目し、方言の使用や場面による方言の切換え意識について調査を行っている。

野林（1971）は、母方言に加え、移住先の方言を習得した者の方言使用について「二重言語生活」と呼び、そのような若年層について主に語彙の使用実態に注目して考察している。

温井（1997）は、奈良県十津川村から奈良県北中部に移住した者を対象¹⁾に、方言の使用意識や対話の相手による方言の切換え意識について調査を行っている。その結果、移住先で身につけたと思われる形式が見られること、インフォーマントはそれらを状況によって使い分けていると意識していることを明らかにしている。

3. 調査の概要

個人の移住と言語変容について考える場合には、以下のようなデータを収集する必要があると考えられる。

- (a) ベースラインデータとしての移住前の談話資料
 (b) 移住後の談話資料

表1 インフォーマント情報

談話番号	話者 ID	年齢	居住歴
1	WFA	20	0- 福井県小浜市
	WFB	20	0-18 福井県小浜市 18-20 京都府京都市 20- 福井県小浜市
2	WMA	25	0-18 福井県若狭町 18- 大阪府東大阪市
	OFA	23	0- 大阪府堺市
3	WMB	22	0-18 福井県小浜市 18- 兵庫県神戸市
	WMC	22	0-15 福井県小浜市 15-21 京都府舞鶴市 21- 兵庫県神戸市
4	WMD	31	0-16 福井県小浜市 16-17 福井県敦賀市 17-18 福井県小浜市 18-26 大阪府大阪市 26- 福井県小浜市
	WME	40	0-18 福井県小浜市 18-26 埼玉県さいたま市 26-34 東京都 34- 福井県小浜市
	WFC	33	0-18 福井県小浜市 18-20 岐阜県岐阜市 20-28 大阪府大阪市 28- 福井県小浜市

しかし、ある個人についてこの両方のデータを収集することは非常に長い時間をかけての経年調査が必要であり、そのような形でデータを収集した先行研究も見られない。また、両方のデータを取る場合にも、移住後の言語変容を考える上では、さらに移住後ある程度の年数がたった時点でのデータ収集が必要となり、さらには経年的にデータを収集し続けることが

有効となることも想定できる。これらすべての談話資料を収集するには、条件に合う協力者が必要である上、研究者も長い期間その研究に従事することが求められる。

このようなことは実際には困難であるので、本稿では、2010年時点で若狭地方外に居住歴を持たない、または居住歴が少ない者の談話資料と、関西地方に移住後5年程度を経過した者の談話資料を収集し、対照することによって、移住による言語変容について考える。ここまで挙げたようなことを踏まえ、以下のような者を対象とした談話の収録を行った。

- (c) 若狭地方外に居住歴を持たないまたは居住歴が短い者（談話1）
- (d) 若狭地方から関西地方に移住後5年を経過した者（談話2・3）
- (e) 関西地方に移住後、再び若狭地方に戻り5年経過する者（談話4）

談話はそれぞれ30分程度の長さで統一し、比較する。インフォーマントの居住歴などは表1²⁾のとおりである。

4. 結果

ここからは、3節においてまとめた調査の結果についてみていく。なお談話例については、聞き取りが不可能、あるいは個人名などが使用されている場合には「#」で示す。

4.1. 否定辞の使用実態

4.1.1. 先行研究

まず、否定辞の先行研究についてみていく。高木（1999）では、若年層の関西方言では否定辞-ン、-ヘンを用いること、またその条件などが明らかにされており、次のようにまとめられている。

-ヘンのみが用いられる場合

- ・存在動詞アル・イル
- ・一段動詞に下接し、否定辞の後続音が /d//m//n/

-ンが用いられる場合

- ・要ル・知ルの2語
- ・慣用的に否定形しか持たないもの
- ・慣用的な表現として否定形がおもに用いられるもの

(高木 (1999: 91) より)

以下では、若狭地方出身者の否定辞使用についてみていく。高木 (2004) では、否定辞が下接動詞の種類ごとの -ヘンの使用などについて詳細に述べられているが、以下では -ヘンが出現しうる環境すべてについてみていくことにする。

4.1.2. 調査結果

表2は、3節でみた談話調査から、否定辞の使用について見た結果である。

表2 否定辞

談話番号	話者 ID	ン	ヘン
1	WFA	16	-
	WFB	13	-
2	WMA	6	10
3	WMB	5	1
	WMC	8	2
4	WMD	20	6
	WME	15	2
	WFC	13	2

それによると、関西地方に居住歴のある WMC、WMA、WMB が -ヘ

ンを使用する一方、関西地方に居住歴のない、もしくは短い WFA、WFB は -ヘンを使用せず、もっぱら -ンを使用していることが分かる。

以下は、若狭地方出身者で関西に居住歴をもたない者の -ンの使用例である。

(1) 010WFB：## しかわからんの。何がいい？

011WFA：ええ、## のことしか思い浮かばん。(談話 1 より)

一方、関西に居住歴をもつ若狭地方出身者（談話 2）は、-ンに加え -ヘンを使用している。

(2) 049WMA：何フェチって聞いたけどなかなか答えてくれへんねん。

(談話 2 より)

WMB と、WMC の会話（談話 3）においても、数は少ないものの、-ヘンの使用がみられた。

(3) 168WMC：ビル一個しか建たへんやん。

(談話 3 より)

次に、談話 4 で見られた否定辞の使用について具体例を示す。表 2 をみると、全員が、否定辞 -ン、-ヘンを使用していることがわかる。

(4) 284WME：なんかわからんのやわ。

(5) 4WME：いやまだ住んどらへん。結局、式終わってから、住もうかな。
(談話 4 より)

以上、結果をまとめると以下のようになる。

(a) 関西に居住歴をもたないインフォーマントが否定辞 -ンのみを使用する

- (b) 関西に居住歴を持つインフォーマントが-ン、-ヘンを使用して
いる

4.2. 「のだ」相当表現の使用実態

4.2.1. 先行研究

松丸（1999）は、野田（1997）における「のだ」の枠組みをもとにして、京都市方言の「ノヤ」「ネン」について表3のようにまとめている。

表3 京都市方言ノヤ・ネンの異同（松丸（1999：69））

	スコープの 「のだ」	ムードの「のだ」			
		対事・非関係	対事・関係	対人・非関係	対人・関係
ノヤ	○	○	○	○	○
ネン	×	×	×	○ [?]	○

○：用いることができる ×：用いることができない ?：命令用法はない

表3によると、「ノヤ」は「のだ」に対応した意味・用法をもつこと、「ネン」はその用法が限られ、対人的ムードの「のだ」に対応する用法でしか用いることができない」（P69）ことがわかる。また、「関係づけ・非関係づけ」の分類はノヤ・ネンの使用に影響しない。

以下本稿の調査結果においては対人的ムードの「のだ」に対応する用法で「ネン」が用いられるという点に注目し、対人的ムードの「のだ」相当表現について、以下調査結果をまとめることにする。

4.2.2. 調査結果

ここでは、4.2.1. 節においてみた先行研究より、対人的ムードの「のだ」にあたる表現について調査結果（表4）をもとにみていく。

表4 「のだ」相当表現

談話番号	話者ID	ノヤ	ネン
1	WFA	9	-
	WFB	11	-
2	WMA	7	4
3	WMB	6	1
	WMC	9	3
4	WMD	2	1
	WME	7	-
	WFC	14	5

表を見ると、談話1ではWFA、WFBともに「ノヤ」のみを使用しており、「ネン」は用いられていない。

- (11) 074WFB：無理なんやけど、そろそろ。今日###で赤飯もらえたんやん、赤飯のおにぎり。 （談話1より）

次に東大阪市で収録した談話2についてみる。ここではWMAが「ネン」を使用していることが、先に見た談話1と異なる点である。

- (12) 299WMA：ちゃう、あれ地味にかっこいい。他とは違うって思っ
てしまう。ちゃう、うちの軽トラなー、荷台傾かへん
ねん。残念ながら。だからこう、荷台傾くタイプの
ん見ると、ちょっとこう羨ましくなる。（談話2より）

談話3は、神戸市で収録したものである。ここでも、談話2と同様、「ネン」が使用されている。

(13) 094WMB：そやから俺#####の学生兼職員やねん。

(談話3より)

最後に、談話4についてみる。談話4は、小浜市で収録されたものである。それぞれ若狭地方外に居住歴を持つものが話しているが、WMEについては関西地方に居住歴を持たない。ここでは、全員が「ノヤ」を使用している。「ネン」については、WMD、WFCにそれぞれ使用が見られた。

(14) 23WFC：降りてくりゃええねん、あの、階段がなあ、階段降りてきて、屋根裏行けるんやけど。そこに物おけるしらくやなあおもて。

(談話4より)

ここまでの結果をまとめると、以下のようになる。

- (a) 関西地方に5年以上の居住歴をもつものに「ネン」の使用が見られた
- (b) 関西地方に5年以上の居住歴をもつものは、現在居住している地域に関わらず、「ネン」を使用している

4.3. 間投助詞の使用実態

4.3.1. 先行研究

ここでは、文節末に用いることができ、特に文末以外の文節末に使用されるものを間投助詞とし、それらについてまとめる。高木(2006:144)では、関西若年層の談話においては間投助詞ナが「ターンを確保して話を続ける場合における使用が多い」(P147)としている。本調査の結果からは、インフォーマントのなかで、図1のような音調が見られた。

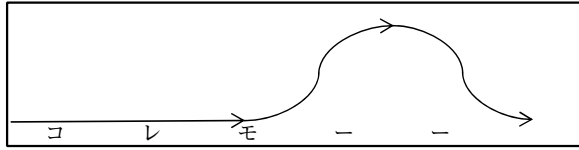


図1 若狭地方出身者に見られたうねり音調

また、新田（1987）は、北陸地方の「間投イントネーション」「ゆすり音調」「うねり音調」と呼ばれるものについて、図2のようなパターンを示している。

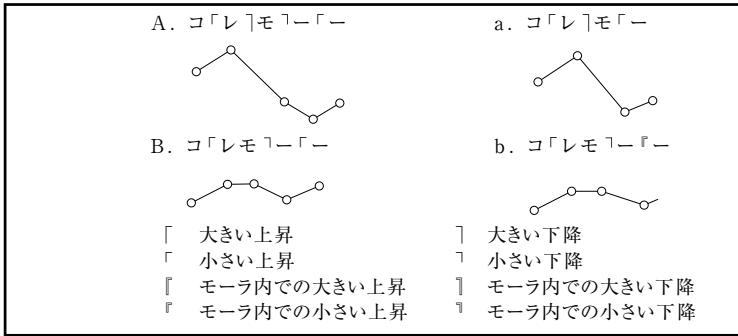


図2 間投イントネーション（新田（1987：20））

今回の調査データで見られた若狭地方方言の音調が、これに類するものは検討が必要であるが、「可能性として、任意の文節末に現れ得る」（新田（1987：23））という特徴が共通であること、間投助詞ナ、サなどと共起することがないということから、本稿では図に見られたようなものを「うねり音調」とし、以下「 \curvearrowright 」で表示して、考察を行う。

4.3.2. 調査結果

以下、談話資料にみられた間投助詞についてみていく。

表6は、若狭地方出身者の間投助詞の使用である。30分間の談話のうち、

間投助詞の使用は多いもので5回程度となっている。使用する間投助詞について、WMC、WME以外の全員に間投助詞ナの使用が見られる一方、間投助詞サの使用が見られるのはWMA、WMEのみである³⁾。

表6 間投助詞

談話番号	話者ID	サ	ナ	ㇿ
1	WFA	-	5	4
	WFB	-	1	3
2	WMA	4	1	-
3	WMB	-	3	-
	WMC	-	-	-
4	WMD	-	2	7
	WME	2	-	2
	WFC	-	5	14

関西に居住歴を持たない若狭地方出身者の談話（談話1）においては、以下のように間投助詞ナおよびうねり音調がみられた。

(15) 213WFB：どうする。なあ、1時間終わった後にな、よく聞いたらあれ、とれてないみたいな。

(16) 254WFA：なあなあ、赤ちゃんㇿ服のㇿメーカーっていっぱいあるやんな。 (談話1より)

大阪に居住する若狭地方出身者の談話（談話2）においては、間投助詞サとナがともに確認できた。神戸に居住する若狭地方出身者の談話（談話3）では、間投助詞ナのみが確認された。

談話4ではWMD、WFCに間投助詞ナの使用が見られる一方、関東に居住経験のあるWMEのみに間投助詞サの使用がみられた。うねり音調は、全員の使用がみられた。

(19) 218WMD：絶対笑わんところ。絶対笑わんところ。まあな、あんなときはな、主役やしな。

(20) 69WME：せっかくやしさあ、白地に、今の白じゃない…

(21) 5WFC：結婚式終わってから。二人ではいれんの。先に入るってゆうとってんけど、ほら、ご飯もつくれんし。

(談話4より)

以上、間投助詞の使用について見てきた。結果は、以下のようになった。

- (a) 若狭地方内に居住しているインフォーマントは、うねり音調と間投助詞ナを使用する
- (b) 関西地方に居住するインフォーマントはうねり音調を使用していない

ここから、若狭地方出身者が、関西地方に居住している間はうねり音調を用いず、若狭地方に戻って再びうねり音調を使用している可能性があると考えられる。

5. 移住と言語変容

調査結果をまとめると、関西地方での居住歴、談話の収録地によって、次のような分類が可能である。

- (i) 関西地方での居住歴の有無で使用が異なるもの(否定辞-ヘン、「のだ」相当表現ネン)
- (ii) 談話の収録地によって使用に違いが見られるもの(うねり音調、疑問のケ)

阿部(2010)は、Anderson(1983)を援用し、共通語の知識について「宣言

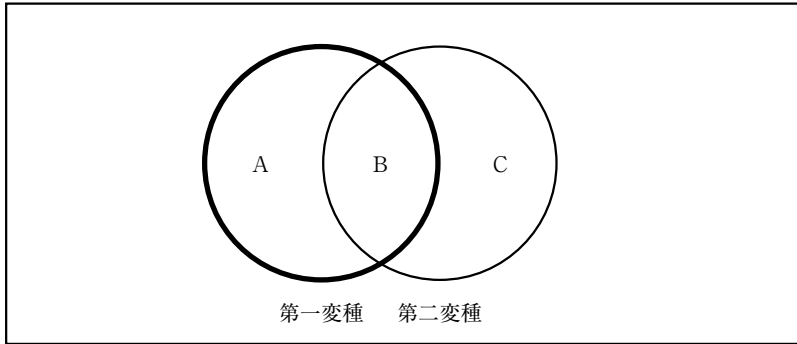


図3 多変種能力モデル（渋谷（2008：181）より）

的知識(declarative knowledge)」と「手続的知識(procedural knowledge)」の2種類があることを示した上で、共通語の習得過程について以下のように考えることができるとしている。

- (1) 宣言的知識を獲得する
- (2) それを運用する手続的知識を獲得する
- (3) 自動化する

また渋谷（2008）は、言語使用者が複数の言語変種をストックしていることを示し、その中の「当該言語使用者が理解はできるが自身では使用しない変種」（P180）について「潜在的なレパートリー」とした。また、日本語使用者の変種に関わる言語能力をモデル化し、図3のように示した⁴⁾。

これらをふまえて、本稿における調査結果を考えてみる。関西地方に移住する前の若狭地方出身者は、否定辞-ヘンや「のだ」相当表現のネンについて、宣言的知識を持っており、彼らの中での「潜在的なレパートリー」としてストックされていたことが考えられる。それは、若狭地方内においても、メディアなどからのインプットが行われていたこと（テレビなどで関西方言を聞いていたこと）などが関係してくると想定される。また、若狭

地方内に住む関西方言話者と接触があることも可能性としてある。そして、関西に移住後、それらの変種が手続的知識となり使用に至ったことが考えられる。

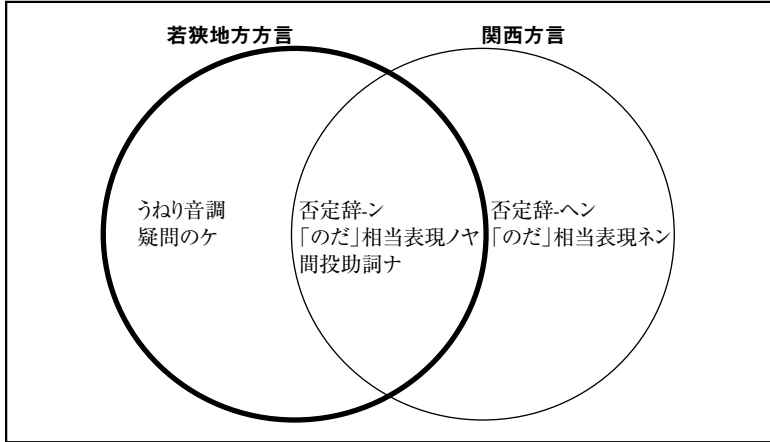


図4 若狭地方出身者

以上のことを考えると、若狭地方出身者は図4のように方言変種をストックしていると考えられる。

6. まとめ

ここまで、若狭地方出身者を対象に、移住と言語変容についてみてきた。結果は以下のようにまとめられる。

- (イ) 関西地方での居住歴の有無によって、方言使用に違いが見られた
- (ロ) 談話の収録地によって、方言使用に違いが見られた

地域社会から進学や就職をきっかけとして移住する者は今後も多く存在することになるだろう。その際、母方言の使われる社会とは異なった社会に入ったことで、それぞれ人々の言語使用はどのような様相をみせるのか。

移住する地域、移住した年齢、本人の方言に対する意識などそれぞれが言語使用に影響していくとすれば、今後様々なケースにおける移住と言語変容について見ていく必要があるだろう。そのような事情もふまえ、今後の課題は多い。今後は、関東をはじめ関西以外に移住した者の方言使用、さらに他地域出身者、他世代の方言使用について、より詳細に研究が行われていくことを期待したい。

注

- 1) 温井 (1997: 29) は、移住の背景について、十津川村では、十津川高校を卒業後多くの者が就職とともに大阪、奈良といった地域に移住することを挙げている。
- 2) 談話2のOFAはWMAの対話の相手であり、大阪府出身者である。談話2について、4節では若狭地方出身者であるWMAの方言使用に注目する。
- 3) OFA(談話2におけるWMAの対話の相手)は間投助詞サ、ナともに使用しているが、間投助詞ナにおいては連続した使用が見られた。
- 4) ここでの円の太線は、母方言や母語など、もっとも意識せずに使用できる変種である。

【参考文献】

- 阿部貴人 (2010) 「方言話者の共通語習得」『日本語学 臨時増刊号 言語接触の世界』29-14, pp134-141, 明治書院.
- 荻野綱男 (1995) 「大阪方言話者の移住による言語変容」徳川宗賢・真田信治編『関西方言の社会言語学』pp178-200, 世界思想社.
- 岸江信介, ダニエル・ロング (1992) 「沖縄から大阪への移住者の言語使用意識」『日本語研究センター報告』2, pp71-84, 大阪樟蔭女子大学日本語研究センター.
- 真田信治編 (2006) 『社会言語学の展望』くろしお出版.
- 渋谷勝己 (2008) 「第6章 言語変化のなかに生きる人々」金水敏・乾善彦・渋谷勝己『シリーズ日本語史4 日本語史のインタフェース』pp177-203, 岩波書店.
- 杉藤美代子 (1981) 「大阪のアクセント」国立国語研究所編『大都市の言語生活一分析編一』pp192-220, 三省堂.
- 高木千恵 (1999) 「若年層の関西方言における否定辞ン・ヘンについて一談話

- から見た使用実態一』『現代日本語研究』6, pp78-93, 大阪大学日本語学講座.
- (2000)「関西における間投助詞「サー」の使用実態」『地域言語』12, pp13-27.
- (2004)「若年層関西方言の否定辞にみる言語変化のタイプ」『日本語科学』16, pp25-46, 国立国語研究所.
- (2006)「関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相」『阪大日本語研究』別冊2, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
- ダニエル・ロング (1989)「京阪方言に対する他地方出身者の意識と方言使用」『待兼山論叢 日本学編』23, pp41-59, 大阪大学文学会.
- (1990)「大阪と京都で生活する他地方出身者の方言受容の違い」『国語学』162, pp12-25, 国語学会.
- 新田哲夫 (1987)「北陸地方の間投イントネーションについて」『金沢大学文学部論集 文科学編』7, pp19-48, 金沢大学文学会.
- 温井孝誠 (1997)「移住における言語変化—十津川村出身者の調査資料をもとに—」『地域言語』9, pp27-43, 天理・地域言語研究会.
- 野田春美 (1997)『Frontier series 日本語研究叢書 9 「の(だ)」の機能』くろしお出版.
- 野林正路 (1971)「少年少女期の二重言語生活」『言語生活』239, pp33-44, 筑摩書房.
- 不二門千里 (1988)「関西出身者の東京移住後の言語意識」『国文鶴見』23, pp44-57, 鶴見大学日本文学会.
- 松丸真大 (1999)「京都市方言における「ノヤ」「ネン」の異同」『阪大社会言語学研究ノート』1, pp61-73, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.
- 余 健 (2003)「首都圏出身者の京阪式語形・アクセントの受容実態—2, 3拍動詞否定形に焦点を当てて—」『三重大学教育学部研究紀要』54, pp71-82, 三重大学教育学部.
- (2006)「社会言語学の学際的特徴を生かした発展の可能性—認知社会言語学的観点から—」真田信治監修／中井精一・ダニエル・ロング・松田謙次郎編『日本のフィールド言語学—新たな学の創造にむけた富山からの提言—』pp232-240, 桂書房.
- Anderson, J (1983) *The Architecture of Cognition*. Cambridge, Harvard University Press.

SUMMARY

Immigration and Language Change: With the Case of the People from Wakasa, Fukui Prefecture

Takafumi HAMADA

This paper is intended to focus on language change among the people making the migration away from their hometown. Specifically three groups were analyzed: first, the people who have lived and grown up in Wakasa. Second, the people who have moved to the Kansai area for more than five years. And finally, the people who came back to Wakasa, after living in Kansai for several years.

As a result, the following three points became clear. First, it has become clear that the people from Wakasa who lives in the Kansai area now use “-hen”. Secondly they also use “nen”. Lastly, “uneri-tone” is recorded from all the informants when they talk in Wakasa area.

The result of this research clearly shows two important facts on the relationship between migration and the language change. The use of “-hen” and “nen” depends on whether the informants have the previous history of residence in Kansai area; on the other hand, whether “uneri-tone” can be found in which they are speaking depends on where they have a conversation.

This paper attempts to cast the new light on the relationship between immigrants and the change of language. The results in this paper, however, are only limited in the materials on the people from Wakasa, Fukui pref. The similar researches on people from other areas are highly expected.